

校長室だより		令和4年2月24日発行
共学共高	第	
	19	発行責任者
	号	白梅学園高等学校長 武内 彰

保育・教育系生徒の卒業研究発表

2月22日(火)3年生進学コースの保育・教育系の生徒たちの卒業研究発表会が開催された。70名の生徒たちが21のグループに分かれ、自分たちで決めたテーマに基づいて研究活動を行い、それを発表する場であった。発表者はビデオカメラ等の設置された教室でプレゼンテーションを行い、その様子をオンラインライブ配信して、1組と2組の教室に分かれて視聴するという形式であった。各グループの持ち時間は5分(入れ替え時間を含めて8分)であるが、21グループあるので、3時間以上かけて行われた。3年1組、2組担任のK先生、E先生を中心に運営が行われ、同時にN先生がICT機器面のサポートを行った。また、授業の空き時間を利用して複数の先生たちも発表を見守ってくれた。どのグループもプレゼンテーションソフトを駆使して、わかりやすい資料を作成し、テーマの紹介と結論、そこに至る研究過程や調査結果等で肉付けをしている。つつい制限時間を守らずに話してしまう傾向のある私たち教員とは異なり(校長だけか?)、どのグループも時間厳守しており、全体に対する気配りができる生徒たちばかりだ。

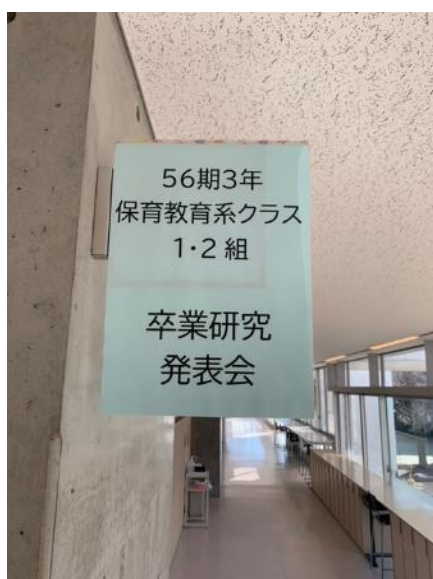
テーマも様々で、個性的なものであるが、ここでは1つのグループについて紹介したい。それは、5班の『外国の保育は日本で取り入れるべきか』である。Kさん、Fさん、Tさん3名のグループによる発表である。彼女たちは、外国にも多様な保育があり、それらを日本に取り入れるべきだとの結論に至ったという。取り上げられた外国の保育は、北欧の「インクルーシブ教育」と「森のようちえん」である。前者は、子どもの年齢・国籍・障害の有無など違いをすべて受け入れて行われる保育である。また、後者は園舎を持たない保育である。インクルーシブ保育の取組として、特徴的な園内環境づくりについてプレゼンが続く。具体的には、食事・昼寝など目的に応じて部屋を使い分けることで、子どもたちが集中して取り組めるようにする。また、誰にでもわかりやすいということを大切にするために、登園時に所持品の始末の仕方がわかる工夫がテーブルになされている、おもちゃを入れる箱にイラストが描かれているなど。さらに、安心できる空間づくりとして「隠れ家」を設置し、その中で気分が落ち着くまで待つことができる場所がある、といった環境が整備されている。

森のようちえんでは、豊かな自然の中にある石や葉っぱなどをふんだんに使って遊びを楽しむ。1日の終わりには、保育者や保護者との間であらゆる情報を共有して、翌日に備える取組をしている。その形態もいくつかあって、保育者の代わりに保護者が当番制で園児た

ちの面倒をみる。また、保育者に加えて保護者が交代でサポートに入る。あるいは、一般的な幼稚園や保育園の形態で活動する。こうした森のようちえんに通っている園児たちの傷病欠席率は、一般の幼稚園に通う園児たちのそれよりも低いという統計もあるようだ。

プレゼンの結びは、インクルーシブ教育と森のようちえんのそれぞれのメリットとデメリットを列挙した上で、「違いから大きな刺激を受け、子どもたちの成長につながる」「多様化が進む社会により適した考えをもつことができるようになる」「挙げたデメリットは普及率が低いことに伴うもので改善が可能である」ことから「外国の保育は日本で取り入れるべきだ」との結論を導いた。

私が高校生の時には、ガリ版（Z世代にとっては死語であろう）で原稿を作って、それを紙に印刷して同級生に配って、発表したものだ。当時の私はシャイで、立派なプレゼンなどできるわけもなかったが、白梅の生徒たちは頼もしい。自分の進路に直結した研究であるとはいえ、校長をはじめ、10名ほどの先生たちが見つめる中で堂々と発表してくれたのだ。これから専門的な学びを積み重ねて、将来は良き保育者や教諭として子どもたちの教育に携わってくれるだろう。教育は未来を創る仕事であり、希望を語る営みである。彼女たちのこれからの活躍に大いに期待をしたい。





(共学共高とは：本校のディプロマポリシー（育てたい生徒像）の一つで、「共に学び、共に高め合う」生徒の姿を表す)